

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『金瓶梅』第一奇書本の評点に関するいくつかの問題について
Author(s)	川島, 優子
Citation	表現技術研究 , 16 : 109 - 120
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50855
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050855
Right	
Relation	



『金瓶梅』第一奇書本の評点に関するいくつかの問題について

川島 優子

はじめに

明末の嘉靖（一五二二～一五六六）から万曆（一五七二～一六一〇）にかけて、出版界において大きな変化があったことについては、大木康氏らの研究によって指摘されるところである⁽¹⁾。この時期には、複雑な体裁を持つ批評付きの版本、すなわち評点本も次々と生み出され、以後、白話小説についても数々の評点本が刊行されるようになる⁽²⁾。明代に作られた『三国演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』といった四大奇書も、一般的に流通したテキストは、李卓吾や金聖嘆、毛宗崗や張竹坡といった文人の批評が付けられたものであり、眉批傍批、圈点傍点といった「評点込み」で紙面が構成されている。

評点本の形式についてはテキストによって違いはあるものの、白話小説についていえば、一般的に本文の右側に小円や小点、線が付される（圈点）、あるいはコメントが加えられ（傍批）、割注の形で本文の間に批評が挿入されることもある（夾批）。また上欄に批語が付される場合も多く（眉批）、これらの情報を排除して本文だけを読むことは難しい体裁になっている⁽³⁾。小説を読むという行為は、「作品と読者」の二者間ではなく、「作品と批評と読者」という三者間で繰り広げられるものだったのである。

ところが清末に石印本が登場すると、評点はカットされるようになり、現代の排印本で批評が反映された一部のテキストも当時の評点本とは体裁を異にする。批評は、作品を読む上での副次的なものへと位置づけが変わってしまったのである。従来、小説の批評はある意味「おまけ」として等閑視される傾向にあり、小説の批評そのものの研究が本格的に始まったのは八〇年代以降になる。しかしその対象は巻首や回前回後に付される総評に集中し、傍批や夾批、圈点などに関心が向けられるようになったのは二〇〇〇年代に入ってからのことである⁽⁴⁾。

筆者は「容与堂刊『李卓吾先生批評忠義水滸伝』の評語に関する考察——「画」を中心として——」（『東方学』第百三十六輯、二〇一八）において、容与堂刊『李卓吾先生批評忠義水滸伝』に見られる一文字の批評「画」を中心に、眉批、傍批、圈点を含む全ての批評に検討を加えた。その結果、評者「李卓吾先生」は、主役である英雄たちの勇ましい姿ではなく、その周囲で人間らしい欲望や感情をむきだしにして生きる小人物たちの姿が活写されている箇所に対して、圈点を巧みに使い分け、眉批や傍批で間髪を入れずにコメントを差し挟むことで、読者の注意を促していたこと、そしてそうした人間の描写にこそ『水滸伝』の真価が表れているとの認識を示していたことを指摘した。評点は、細かい部分に至るまで計算された上で付されているのである。

しかし同じ作品につけられた同じ評者の批評であっても、版が異なれば、その評点に異同が見られる場合も少なくない。この現象は、評点を研究するに当たっては看過できない問題である。従来、テキスト間の評点の異同は、版本研究の一材料として扱われる傾向にあった。しかし、評点の違いは、評者の意図やテキストの方向性に直接関わってくる問題である。それに伴い、読者の読みにも関わってくる。たとえば、曲亭馬琴が『水滸伝』の金聖嘆評から多大なる影響を受けたことは先行研究によって指摘される通りであり^⑤、また、江戸時代に作られた『金瓶梅』関連の資料からは、そこに付された張竹坡の評までもが読み込まれていたことが窺える^⑥。しかしたとえ同じ『水滸伝』金聖嘆評であったとしても、同じ『金瓶梅』張竹坡評であったとしても、テキストが異なり、付された評点が異なれば、その読みにも影響が及びうるのである。

本稿では、こうした評点本に見られる問題について、『金瓶梅』「第一奇書本」のうち、いくつかの版本に見られる張竹坡評の違いを具体的に指摘することで、評点研究における課題を述べたい。

一 第一奇書本について

『金瓶梅』のテキストは大きく三つの系統に分けることができる。

- (1) 万曆四十五年(一六一七)の序を持つ「金瓶梅詞話」(通称「詞話本」「万曆本」等)。

- (2) (1)に改訂が加えられ、評点が付されたもので(評者は不明)、崇禎年間(一六二八〜一六四四)に刊行されたとされる「新刻繡像批評金瓶梅」(通称「崇禎本」「改訂本」等)。

- (3) (2)の本文に清代の文人張竹坡(一六七〇〜一六九八)が新たに批評を付けた「第一奇書金瓶梅」(通称「第一奇書本」「張竹坡批評本」等)。巻首に康熙三十四年(一六九五)に書かれた謝頤の序が付される。

このうち実際に最も広く流通したのは(3)「第一奇書本」である。第一奇書本の特徴については、鳥居久靖「『金瓶梅』版本考」(『天理大学学報』第十八輯、一九五五)に次のように整理される。

第一奇書本の特徴は、竹坡の評を、割注として本文中に入れるほか、巻首に康熙乙亥の年に書かれた謝頤の序(「叙」に作る刊本あり)を附し、閲読に際しての全書の予備知識の集大成ともいふべき十数項にわたる附録(以下「巻首附録」と総称する)を巻首に載せることである。テキストによっては内の一、二を欠くが、多くは全部を載せる。その項目は次のとおり。

- (一) 凡例 (二) 竹坡閒話
(三) 西門慶房屋 (四) 西門慶家人名数
(五) 西門慶家人媳婦 (六) 西門慶淫過婦女
(七) 潘金蓮淫過人目 (八) 第一奇書目
(九) 雜録小引 (十) 寓意説
(十一) 趣談 (十二) 冷熱金針

(十三) 苦孝説

(十四) 非淫書説

(十五) 誦法

就中、本書閲読の指針を述べた「誦法」は、計一百八条一万二千字、巻首附録中の圧巻と称すべきものである。

補足すれば、こうした冒頭の付録の他に、各回の頭に付けられた評(回前評)がある。また「竹坡の評を、割注として本文中に入れる」(夾批)以外にも、文字の傍らに付される傍批、上欄に付けられた眉批があり、本文には小円や小点などの圈点も付されている。

この第一奇書本については、さらに複数の版元から刊行された版本が存在しており、複雑な様相を呈している。主な版本としては、「本衙蔵板翻刻必究本」「在茲堂本」「康熙乙亥本」「皐鶴草堂本」「影松軒本」「四大奇書本」「本衙蔵版本」「崇経堂刻本」「六堂刻本」「全圖書業堂刻書」などがある(7)。

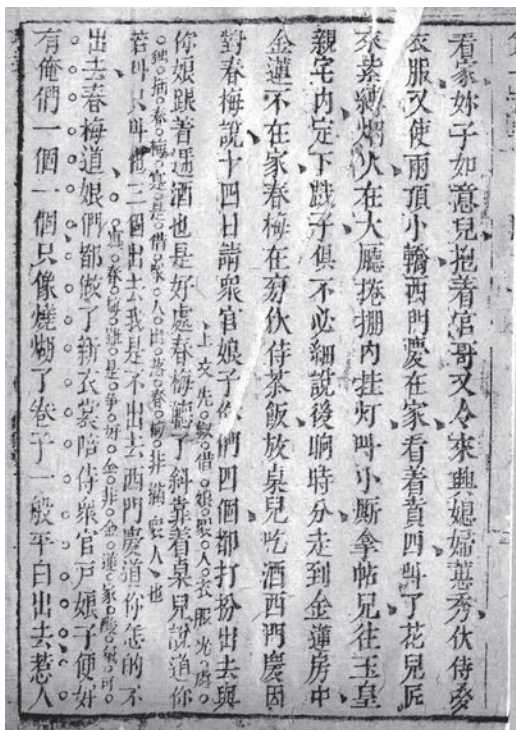
日本においても、江戸時代以降、一般に流通したのはこの第一奇書本であり(8)、現在、国立国会図書館、国立公文書館、市立米沢図書館、東京大学、京都大学、早稲田大学、慶應大学、天理大学、東洋文庫、静嘉堂文庫などの機関に所蔵が確認される。

本稿では、日本国内に所蔵される『皐鶴堂批評第一奇書金瓶梅』(第一奇書本)のうち、オンラインでの閲覧が可能な以下の三種を取り上げ、その評点の状況を確認していきたい(9)。

①国立国会図書館蔵 封面『彭城張竹坡批評金瓶梅 第一奇書影松軒板』 全三十五冊

②東京大学東洋文化研究所蔵 封面『全像金瓶梅 彭城張竹坡批評 第一奇書 玩花書屋蔵板』 全二十四冊
③市立米沢図書館蔵 封面『康熙乙亥年 李笠翁先生著 第一奇書 在茲堂』 全十六冊

なお、王汝梅校注『皐鶴堂批評第一奇書金瓶梅』(吉林大学出版社、一九九四)の前言に拠れば、康熙三十四年(一六九五)に刊刻された第一奇書本の初版本は、大連図書館所蔵の「本衙蔵板翻刻必究本」であるという(10)。そこで本稿では参考として、この王汝梅氏の校注本(以下「王汝梅校注本」とする)を用いて確認を行う(11)。



【国立国会図書館デジタルコレクション『皐鶴堂批評第一奇書金瓶梅』第四十一回二葉ウラ】

二 巻首の付録について

上述したように、鳥居氏は第一奇書本の巻首の付録について十五の項目を挙げ、「テキストによつては内の一、二を欠くが、多くは全部を載せる」とするが、具体的に①②③の掲載状況は以下の通りである。

①国立国会図書館蔵 影松軒板

- 〈第一冊〉…序、(二)竹坡閑話、(十)寓意説、(十一)趣談、(九)雑録小引、(十三)苦孝説、(四)西門慶家人名数、(五)西門慶家人媳婦、(六)西門慶淫過婦女、(七)潘金蓮淫過人目、(三)西門慶房屋、図

〈第二冊〉…図

〈第三冊〉…(十五)読法(八)第一奇書目

* (一)凡例、(十二)冷熱金針、(十四)非淫書説、欠。

〈第四冊〉…第一回(以下、回前評アリ) (12)

……

①においては、(三)「西門慶房屋」と(十五)「読法」の間に図を挟む。また、第一回以降、回前に総評を付す。この「影松軒板」については、早稲田大学図書館所蔵の二種がデジタル公開されている⁽¹³⁾。そこで参考までにこの二種についても掲載状況を示す。

【参考A 早稲田本付属図書館蔵 影松軒板(「第一奇書」へ21 01386)】

〈第一冊〉…序、(二)竹坡閑話、(十)寓意説、(十一)趣談、(九)

雑録小引、(十三)苦孝説、(四)西門慶家人名数、(五)西門慶家人媳婦、(六)西門慶淫過婦女、(七)潘金蓮淫過人目、(三)西門慶房屋、(十五)読法、(八)第一奇書目

* (一)凡例、(十二)冷熱金針、(十四)非淫書説、欠。

〈第二冊〉…第一回(以下、回前評アリ)

……

【参考B 早稲田本付属図書館蔵 影松軒板(「第一奇書」へ21 03765)】

〈第一冊〉…序、(八)第一奇書目、図、第一回(回前評アリ)

* (二)竹坡閑話、(七)寓意説、(十二)趣談、(九)雑録小引、(十三)苦孝説、(四)西門慶家人名数、(五)西門慶家人媳婦、(六)西門慶淫過婦女、(七)潘金蓮淫過人目、(三)西門慶房屋、(十五)読法、(一)凡例、(十二)冷熱金針、(十四)非淫書説、欠。

〈第二冊〉…第二回(以下、回前評アリ)

……

同じ「影松軒板」であっても、①は(三)「西門慶房屋」と(十五)「読法」の間に図を挟むのに対し、参考Aには図がなく、参考Bは(八)「第一奇書目」を掲載するのみで、張竹坡批評の真骨頂ともいえるべき(十五)「読法」は見られない。

②東京大学東洋文化研究所蔵 玩花書屋蔵板

〈第一冊〉…序、(十一)趣談、(四)西門慶家人名数、(五)西門

慶家人媳婦、(六) 西門慶淫過婦女、(七) 潘金蓮淫過人目、(三) 西門慶房屋、(十) 寓意説、(二) 竹坡閒話、(九) 雜録小引、(十三) 苦孝説、(十五) 読法、(八) 第一奇書目

* (一) 凡例 (十二) 冷熱金針 (十四) 非淫書説、欠。

《第二冊》… 図

《第三冊》… 第一回く(以下、回前評アリ)

…

③市立米沢図書館蔵 在茲堂

《第一冊》… 序、(九) 雜録小引、(一) 凡例、(三) 西門慶房屋、(十) 一) 趣談 (*第二葉ウラ (第四十三条まで)、(十五) 読法 (*第四葉ウラまで)、(二) 竹坡閒話 (*第二葉ウラまで)、(十三) 苦孝説、(十一) 趣談 (*第三葉オモテ (第四十四条 から)、(二) 竹坡閒話 (*第三葉オモテから)、(十五) 読法 (*第五葉オモテから)、(十四) 非淫書説、(十二) 冷熱金針、(十) 寓意説、(四) 西門慶家人名数 (*第三葉、第一葉のみ)、(八) 第一奇書目、(五) 西門慶家人媳婦、(六) 西門慶淫過婦女、(七) 潘金蓮淫過人目、第一回く(以下、回前評ナシ)

…

③にかなりの乱丁が認められることはひとまず措き、①②③の三種の版本について、巻首の付録の掲載項目と掲載順は、それぞれ全く異なっていることが確認できる。①と参考A、参考Bのように、同じ「影

松軒板」であってもテキストによって異同が確認できたが、今回対照した三種の「影松軒板」については、掲載順そのものが前後することはなかった。しかし宋真栄「論韓国梨花女子大学所蔵的『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』」(徐州工程学院学报(社会科学版) 第二十五卷第五期、二〇一〇)に拠れば、「本衙蔵板翻刻必究本」である大連図書館蔵本、梨花女子大学蔵本については掲載順にも違いが見られるという。

以上、巻首の付録については、版本によって差が非常に大きく、同版であっても掲載される項目やその配列に相当程度の違いが存在していることが確認できた。何が、どの順番で掲載されているか、という問題と、評者の意図を結びつけることは極めて難しい。

また、このことは張竹坡評の受容にも関わってくる。たとえば江戸時代に作られた『金瓶梅』の注釈書『金瓶梅訳文』は、冒頭の付録に見られる難解語彙についても掲載するが⁽¹⁴⁾、ここからは、彼らが底本として用いたテキストには少なくとも「西門慶房屋」「西門慶淫過婦女」「潘金蓮淫過人目」「趣談」があったこと(またおそらくこの掲載順であったこと)は窺えるものの、「読法」中の語彙は取り上げられておらず、張竹坡の『金瓶梅』観が示される「読法」を有するテキストであったのかどうかについては不明である。一方、曲亭馬琴の日記、書翰からは、彼が張竹坡の「読法」を読み込み、自作の序文にも引用するなど、大きな影響を受けていたことがわかる⁽¹⁵⁾。テキストによって、『金瓶梅』の読み、あるいは「張竹坡評なるもの」が変わってくるのである。

三 眉批について

次に、眉批について確認していききたい。「王汝梅校注本」に拠れば「本衙蔵板翻刻必究本」には大量の眉批が確認できるが、①②については眉批が見られず、③についてのみ眉批が確認できる。そこで、試みに③の眉批を、「王汝梅校注本」と対照してみたところ、③にのみ見られるもの（第十六回九葉オモテ、第七十八回二葉オモテ、第七十九回十四葉ウラ、十五葉オモテ等）、「王汝梅校注本」にのみ見られるもの（第三十九回七葉オモテ、第四十七回九葉オモテ、第五十八回二十葉ウラ、第八十三回七葉オモテ、第九十三回三葉ウラ等¹⁶）が確認できる。また、③で眉批として付されているものが（第七十九回二十五葉ウラ等）、「王汝梅校注本」では傍批とされているケースもある。また、眉批間の文字の異同（第五十回二葉ウラ、第五十一回十三葉オモテ、第七十八回二十葉ウラ等）も確認できる。

以上、眉批については、付されている版本と付されていない版本とが存在すること、付されているものについても、テキストによって有無の違いや文字の異同等が存在している可能性が高いことが確認できた。

しかし実際の問題はより複雑である。眉批が付されていない版本は、単にその眉批を欠く、というわけではなく、それが傍批という形で付されているのである。

四 夾批・傍批について

眉批が上欄に付されるのに対し、本文に割注の形で挿入される夾批、あるいは文字の傍らに付される傍批は、後述する圈点と同様、本文を読むうえで否が応でも目に入ってくるため、読みに与える影響はより大きいように思われる。ここでは主に第三十九回を取り上げて検討を加えたい。夾批については、①②③で異同は見られなかったが（「如画」と「加画」といった細かい文字の異同を除く）、傍批については、単なる文字異同にとどまらない違いが確認される。以下、具体的な例を挙げながら確認していききたい（字体は常用字に統一する）。

〈例一〉

- ①第三十九回五葉ウラ第七行傍批 「上皇廟両番極写却不覚重」
 - ②第三十九回五葉オモテ第一行傍批 「五皇廟両番正写却不覚重」
 - ③第三十九回四葉オモテ第十一行傍批 「上玉皇廟両番描写却不覚重」
- * 「王汝梅校注本」は傍批「玉皇廟両番描写、却不覚重」に作る。

文字の異同は少なからぬ箇所を確認できる。たとえば〈例一〉は、正月九日に玉皇廟を参拝に訪れた西門慶が、宝殿に掛けられる聯を目にする場面に付された傍批である。廟の名称が「上皇廟」「五皇廟」「上玉皇廟」と異なっているが、本文はいずれも「玉皇廟」に作ることから、「上」も「五」も、「玉」字の誤刻と見られる。「上皇廟」「五皇廟」については本文と齟齬が生じるが、「両番極写」「両番正写」「両番描写」、また「却不覚重」「却不覚重」の異同については、意味は異なるものの、いずれも批評として成立する。

〈例二〉

- ①第三十九回七葉ウラ第四行傍批 「反云隠荐司吏」 *本文は「門薦」
- ②第三十九回六葉ウラ第一行傍批 「反云府荐可嘆」 *本文は「府薦」
- ③第三十九回六葉オモテ第四行傍批 「反云附荐可嘆」 *本文は「附薦」

*「王汝梅校注本」は傍批「反云「附薦」可嘆！」に作る。

この傍批は、西門慶が玉皇廟で息子官哥のために道士に祈祷をしてもらう際、その祈祷文の一部に付されたものである。ここでは、まず官哥の息災が祈祷され、その後「附薦西門氏門中三代宗親等魂……」と、西門氏の門中、三代の宗親等の魂が祭られる。「附薦（ついでに祭る）」というは「可嘆（嘆かわしい）」、という指摘である。②③については、本文の文字がそれぞれ「府薦」「附薦」となっており、傍批もそれに対応しているが、①については「門薦」に作り、「反云隠荐司吏」という傍批とも対応していないために意味がわかりにくい。

〈例三〉

- ①第三十九回十一葉ウラ第九行傍批 ナシ
- ②第三十九回九葉ウラ第十行傍批 ナシ
- ③第三十九回十葉オモテ第一行傍批 「妙絶」

*「王汝梅校注本」は傍批「妙絶。」に作る。

〈例四〉

- ①第四十回二葉ウラ第七行傍批 ナシ

- ②第四十回二葉オモテ第七行傍批 ナシ

- ③第四十回一葉ウラ第六行傍批 「団醋一一」

*「王汝梅校注本」は傍批「一団醋意。」に作る。

〈例五〉

- ①第四十回六葉オモテ第二行傍批 ナシ（圈点のみ）
- ②第四十回四葉ウラ第九行傍批 ナシ（圈点のみ）
- ③第四十回四葉ウラ第五行傍批 「悄悄何意」

*「王汝梅校注本」は傍批「悄悄、何意？」に作る。

〈例六〉

- ①第四十回四葉オモテ第一行傍批 「又是一个親家」
- ②第四十回三葉オモテ第六行傍批 ナシ
- ③第四十回二葉ウラ第八行傍批 「又是一个親家」

*「王汝梅校注本」は傍批「又是一个親家。」に作る。

〈例三〉 〈例四〉 〈例五〉は、③（および「王汝梅校注本」）にのみ傍批が見られ、①②には見られない例である。一方、〈例六〉は②のみが傍批を欠く。

〈例七〉

- ①第三十九回六葉ウラ第三行傍批 「何処算帳」
 - ②第三十九回五葉ウラ第四行傍批 「何処」
- 第六行傍批 「算帳」

③第三十九回五葉オモテ第五行傍批 「何処算帳」

*「王汝梅校注本」は傍批「何処算帳？」に作る。

〔例七〕は、玉皇廟での祈祷について、呉道官と西門慶が話をする

場面である。ここで呉道官は、西門慶の息子官哥の長寿と西門家の繁栄を言祝ぐとともに、二十四分を足して天地の神々に、十二分を足して上帝に、また二十四分を足して亡き人々に向けて、あわせて百八十分の祈りを捧げたという。本文「又添了二十四分答謝天地」に対して、①③（および「王汝梅校注本」）においては「何処算帳（いつたどこで帳尻が合うのだ）」という傍批が付されているが、②では「何処」と「算帳」が離れた位置に付されているため、意味が通りにくくなっている。

〔例八〕

①第三十九回八葉オモテ第七行傍批 「以上一段押文書」

②第三十九回七葉オモテ第二行傍批 「以上二段押文書」

③第三十九回六葉ウラ第六行傍批 ナシ *眉批「以上一段押文書」

*「王汝梅校注本」は傍批ナシ、眉批「以上一段押文書。」に作る。

〔例九〕

①第三十九回十五葉オモテ第一行傍批

「講經卷亦作四段写此処接念偈言以上作一段」

②第三十九回十二葉オモテ第九行傍批

「講經卷亦作四段写此処接念偈言以上作一段」

③第三十九回十二葉ウラ十三葉オモテ傍批

ナシ *眉批「講經卷亦作四段写此処接念偈言以上作一段」

*「王汝梅校注本」は傍批ナシ、眉批「講經必亦作四段写。此処接念偈言以上作一段。」に作る。

〔例八〕〔例九〕は、③（および「王汝梅校注本」）では眉批として配されているものが、①②では傍批として付されている例である。

上述したように、①②は単に眉批を欠いているのではなく、③で眉批として付されていた批語が、①②では傍批として付されるケースが非常に多い。

〔例十〕

①第四十回二葉ウラ傍批 ナシ

②第四十回二葉オモテ傍批 ナシ

③第四十回一葉ウラ傍批 ナシ *眉批「可知雪夜燒香俱出禿奴之計」

*「王汝梅校注本」は傍批ナシ、眉批「可知雪夜燒香、俱出禿奴之計。」に作る。

〔例十一〕

①第四十一回六葉オモテ第七行傍批 「是不敢去」

②第四十一回六葉ウラ第一行傍批 「是不敢不去写尽依勢之苦」

③第四十一回五葉オモテ第一行傍批 「不敢去」

④第四十一回五葉オモテ第五行傍批 「是不敢不去写尽依勢之苦」

⑤第四十一回四葉ウラ五葉オモテ傍批 ナシ *眉批「不好坐的是不敢去

怎敢不去是不敢不去写尽衣勢之苦」

*「王汝梅校注本」は傍批ナシ、眉批「「不好坐的」是不敢去、「怎敢不去」是不敢不去。写尽衣勢之苦。」に作る。

しかし③の眉批が①②では全て傍批として処理されているわけではない。〈例十〉のように、③（および「王汝梅校注本」）では眉批に作るものが、①②には眉批、傍批、夾批のいずれの形においても見られないケースもある。また〈例十一〉は、③（および「王汝梅校注本」）で眉批として付されているものうち、一部のみが①②の傍批として付されるケースである。③が本文の「不好坐的」、「怎敢不去」を引用した上でそれぞれ解説を加えるのに対し、①②は本文「不好坐的」、「怎敢不去」の傍らに直接解説を加えるため、本文の引用は省略されている。つまり、③の眉批が機械的に①②の傍批として移されているのではなく、無駄のない形で合理的に配されていることが窺えるのである。

以上、傍批については、文字の異同、有無の違いが存在することはもとより、③では眉批として配されていたものが、①②では傍批として配されていること、しかし全てが対応しているわけではないこと、また機械的に移行されているわけでもないことが確認できた。眉批、夾批、傍批については、それぞれ批評としての役割の違いがあることが想定できるものの、上述の例からは、テキストによってそうした前提を見直す必要があることがわかる。

五 圈点について

圈点については、①②③ともに主として小円が用いられているが、一部に小点も認められる。また、付される位置にも違いが見られる。

〈例十二〉

- ①第一回十二葉オモテ回首詩 最終字のみ圈点アリ
- ②第一回九葉ウラ十葉オモテ回首詩 最終字のみ圈点アリ
- ③第一回一葉オモテ回首詩 全体に圈点アリ

たとえば〈例十二〉の回首の七言詩（一解、二解）では、③については全体に圈点が付されるものの、①②では各句七字目のみ圈点が付される。同様に、詩に付される圈点については多くの箇所が異同が見られる。

〈例十三〉

- ①第四十一回三葉オモテ第六行 「衣裳一件」
- ②第四十一回二葉ウラ第三行 「衣裳一件」
- ③第四十一回二葉オモテ第四行 「衣裳一件」

〈例十四〉

- ①第四十一回四葉オモテ第一行 「趕着月娘呼姑娘」
- ②第四十一回三葉オモテ第五行 「趕着月娘呼姑娘」
- ③第四十一回二葉ウラ第八行 「趕着月娘呼姑娘」

〈例十三〉では、①③には見られない圈点が②にのみ認められ、〈例

十四〉では、①②には見られない圏点が③にのみ認められる。

〈例十五〉

①第三十九回七葉才モテ第一〜三行

「西門慶道你只添上個李氏辛未年正月十五日卯時建生同男官
哥兒丙申年七月廿三日申時建生罷」

②第三十九回六葉才モテ第一〜三行

「西門慶道你只添上個李氏辛未年正月十五日卯時建生同男官
哥兒丙申年七月廿三日申時建生罷」

③第三十九回五葉ウラ第二行〜四行

「西門慶道你只添上個李氏辛未年正月十五日卯時建生同男官
哥兒丙申年七月廿三日申時建生罷」

〈例十五〉は①②③において、圏点の位置が少しずつ異なっている。こうした例は非常に多く、圏点がどれほど厳密に付けられているかについては慎重に検討しなければならない。

〈例十六〉

①第三十九回十二葉ウラ第五行〜六行

「金蓮接過來說道什麼小道士兒倒好相個小太乙兒」

②第三十九回十葉ウラ第二行〜三行

「金蓮接過來說道什麼小道士兒倒好相個小太乙兒」

③第三十九回十葉ウラ第六行〜七行

「金蓮接過來說道什麼小道士兒倒好相個小太乙兒」

〈例十六〉は、②では小円と小点が用いられており、一見すれば意図的に使い分けがなされているかのようにも思えるが、①③においては全て小円である。

以上、圏点についても、テキストによって相当程度の異同が存在していることが確認できた。

おわりに

筆者は『金瓶梅』を中心とした白話小説の版本について調査を行う過程で、いかに刷りの状態が悪くとも「小説は評点を伴うものである」ということに改めて気づかされた。版木の摩滅等によって文字がつぶれやすい評点は真つ先に削られてもおかしくはなく、評点がない方が読みやすいようにも思われる（実際、石印本が登場すると批評はカットされるようになる）。しかし多くの小説はあくまで「評点込み」で一つの世界を構成しており、最初から「批評ありき」で作られたと思われる作品も存在している。評点の研究は、版本研究の一材料にとどまらず、小説の作られ方、出版の様相、受容の在り方など、様々な問題を考える上で、重要な視点をもたらさうものと考えられる。

しかし、本文以上にテキスト間の異同も大きく、目的によって慎重にテキストを選定することが求められる。筆者はかつて張竹坡の批評を考察する際、どのテキストを用いるべきかについて頭を悩ませた。果たしてどのテキストが最も張竹坡の意図を反映しているのか、そも

そも「評者張竹坡」とは誰なのか、何を以て「張竹坡評」とすべきなのか。評者と評点との関係についても、今後改めて検討する必要がある。なお、今回の調査ではオンラインでの閲覧が可能なデジタル版を用いたが、影印本においては、特に評点において相当程度の加工が行われている可能性があることにも留意する必要があることを加えておきたい(17)。

単に筆者の認識不足によるものかもしれないが、評点研究が一筋縄ではないか問題を多分に含むことを改めて痛感したため、ここにならずかながら例を挙げて、共有しようとする次第である。

注

- (1) 大木康氏には、『明末江南の出版文化』（研文出版、二〇〇四）『中国明末のメディア革命―庶民が本を読む―』（刀水書房、二〇〇九）ほか、一連の研究がある。
- (2) 評点本については、高津孝「宋元評点考」（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第三十一号、一九九〇）、「明代評点考」（『東方学会創立五十周年記念 東方学論集』一九九七）、表野和江「明末呉興凌氏刻書活動考―凌濛初と出版―」（『日本中国学会報』第五十集、一九九八）等に詳しい。
- (3) 高津孝「明代評点考」（注(2)）に拠れば、「圏点」は、本文の特に優れた字句表現、重要な語句に対して付された傍点、傍圏、傍線などである。形式は様々で、よく使用されるものとして、圏（あるいは圏点）、点（あるいは傍点）、抹がある。「圏点」は各字の横に小円を付すこと、点は各字の横に小点を付すこと、抹は傍線である。これら諸符号をまとめて「圏点」と呼ぶ。また、「圏点」とともに用いられるものとして、「批評」がある。「批評」は、本文に対して処々に短いコメントを付すものであり、その場所により、眉批、夾批、傍批、総批、また、眉評、挟評、旁評、総評とよばれる。この「圏点」と「批評」をあわせて、「評点」あるいは「批点」という。ともに、本文に対する批評行為である。」とする。本稿で用いる用語は、原則として高津氏に拠る。
- (4) 高津孝氏前掲論文のほか、譚帆『中国小説評点研究』（華東師範大学出版社、二〇〇二）、大木康「馮夢龍の批評形式」（『馮夢龍と明末俗文学』汲古書院、二〇一八）、笠見弥生「凌濛初と評点」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第二十一号、二〇一八）等がある。
- (5) 濱田啓介「近世小説の水滸伝受容私見―『新編水滸画伝』と馬琴の金聖歎批判―」（『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版社、一九九三）、張小鋼「金聖嘆と滝沢馬琴の小説論」（中京短期大学『論叢』第二十七巻、一九九六）、神田正行『馬琴と書物―伝奇世界の底流―』第二部「中国白話小説の披閱と受容」（八木書店、二〇一一）等に詳しい考察がある。
- (6) 拙著『『金瓶梅』の構想とその受容』第二部「江戸時代の『金瓶梅』」（研文出版、二〇一八）を参照されたい。
- (7) 黄霖主編『金瓶梅大辞典』（巴蜀書社、一九九一）に拠る。

(8) 注(6)と同じ。

(9) ①については「国立国会図書館デジタルコレクション」
(<https://dl.ndl.go.jp/search/searchResult?featureCode=all&searchWord=%E7%AC%A%E4%B8%80%E5%A5%87%E6%9B%B8&fulltext=1&viewRestricted=0>) を、②については「市立米沢図書館デジタルライブラリー」(<http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/A110.html>) を、③については「東京大学東洋文化研究所所蔵漢籍善本全文影像資料庫」(http://shanben.ioc.u-tokyo.ac.jp/main_p.php?nu=D8644800&order=m_no&no=04540) を利用して調査を行った。

(10) 本書は、大連図書館所蔵「本衙蔵板翻刻必究本」と吉林大学図書館蔵「本衙蔵板翻刻必究本」の本文および評語に文字の異同があることを挙げ、吉林大学図書館蔵本は大連図書館蔵本に加筆修正を加えたものであること、吉林大学図書館蔵本の方が「優れている」ことを指摘した上で、吉林大学図書館蔵本を底本とし、大連図書館蔵本を校定に用いる。

(11) 「本衙蔵板翻刻必究本」については、日本国内でもいくつかの所蔵が確認されており、筆者も二〇一九年に東洋文庫所蔵ものを調査した。しかしオンラインでのデジタル公開はされておらず、新型コロナウイルスの影響もあって最終的な確認を行うことができなかったため、今回は王汝梅氏の校注本を参考として用いるにとどめる。

(12) 以下、回前評について、ウェブ上のデータを確認する限りにおいてはテキストによって一部落丁も見られる(たとえば①では

第五十一回および第七十九回の回前評を欠く、等)。しかしここでは版本の問題を検討するわけではないため、落丁、乱丁については取り上げない。

(13) 参考A、参考Bについては、「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」(https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he21/he21_01586/index.html) (https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he21/he21_03765/index.html) を利用して調査を行った。

(14) 『金瓶梅訳文』については、拙稿「江戸時代の『金瓶梅』」(『アジア遊学』一〇五 特集日本庶民文芸と中国)(勉誠出版、二〇〇七)を参照されたい。

(15) 注(6)と同じ。

(16) ここで挙げる葉数は、③「市立米沢図書館蔵本」のものである。

(17) 拙稿「台北故宮博物院蔵『金瓶梅詞話』の影印本をめぐる」(『中国学研究論集』第三十三号、二〇一五)を参照されたい。

〈付記〉

今回の調査でデジタルデータを利用させていただいた各機関に、改めて感謝の意を表したい。

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「中国通俗小説の批評に関する研究」(研究課題番号:20K00370)による研究成果の一部である。

(かわしま ゆうこ、広島大学大学院人間社会科学研究所教授)